ハンガリーのトーナルシステムは留学しなくても学べるか!?

【バルトークのトーナルシステムとは…】

1990年8月31日(金)〈東音〉ホール　AM. 10:15〜PM. 12:15

今回の講義は，バルトークの音組織について次の三つの事柄が中心です。

1. Axis system（アキシス システム）中心軸システム
2. 1：2，1：3，1：5型の旋律
3. Alpha chords（アルファーコード）

システムの定義と発見は，ハンガリーの音楽学者Ernö Lendovai（エルネ・レンドヴァイ）先生によって発見されました。このシステムは，1.西欧音楽の組織的な発達の延長，2.正格の反復進行（機能的連鎖）トニック，ドミナント，サブドミナントの規則的な繰り返しを，五度圏全体に拡げたもの，3.オクターブを12の等間隔に分割した原理，以上３つの違った局面から推論されました。

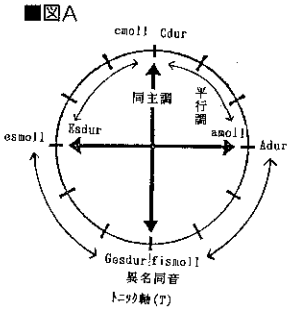
2つめの局面からAxis systemについて

古典派の音楽は３つの和声機能（トニック，ドミナント，サブドミナント）の上に成り立っていることはご承知の通りです。例えばC-durではCがトニック，これの５度上のGは強力なドミナント，５度下のFはサブドミナントというように，それぞれの機能がC-durを成り立たせています。これをC-durの平行調であるa-mollでも同じことを考えてみます。

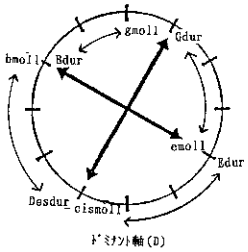
トニックCと平行調のAはトニックの機能を，ドミナントGと平行調のEはドミナントの機能を，サブドミナントFと平行調のDはサブドミナントの機能を，それぞれ持つことがいえます。

Cを主音として，同主調と平行調の関係をたどっていくと，次のようなAxis（中心軸）ができます。

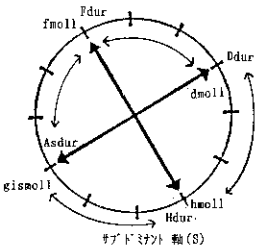
■図A



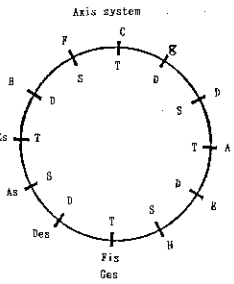
■図B



■図C



■図D



トニック軸，ドミナント軸，サブドミナント軸を合わせると，Axis systemができます。正格連鎖　E—A—D—G—C—Eの中にドミナント（D）トニック（T）サブドミナント（S）が規則的に反復されています。又，Cを主音とした場合，

- C，Es（Dis），Fis（Ges），Aを根音とする和音はトニックの機能を持つ
- E，G，B（Ais），Cis（Des）を根音とする和音はドミナントの機能を持つ

・D，F，As (Gis)，Hを根音とする和音はサブドミナントの機能を持つことが言えます。

3つめの局面、オクターブを12の等間隔に分割する原理から2つめの課題 1:2、1:3、1:5の型(旋律)について；

1を半音の単位とすると，2は長2度，3は短3度，5は完全4度....等となります。

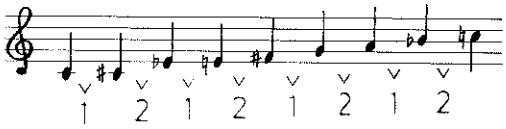
よって，1：2型は短2度(1)，と2度(2)の2つの音程の繰り返しが型となります。

（例えば）

C—Cis—Es—E—Fis—G—A—B—C

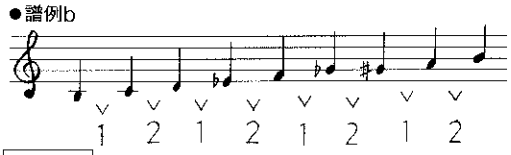
1 2 1 2 1 2 1 2

●譜例a



作品例としてMikrokosmos No.109

●譜例b

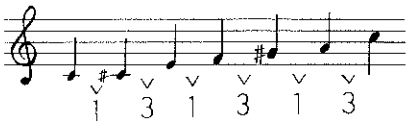


1：3型は，短2度(1)と完全3度(3)の繰り返しです。

（例えば）C—Cis—E—F—Gis—A—C

1 3 1 3 1 3

●譜例c



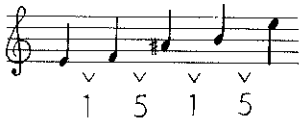
1：5型は，短2度(1)と完全4度(5)の繰り返しです。

（例えば）C—Cis—Fis—G—C

1 5 1 5

作品例としてMikrokosmos No.92

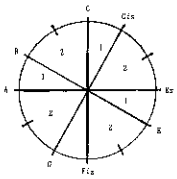
●譜例d



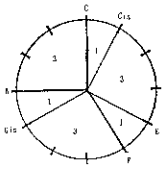
以上の事柄を図に表しますと二つの音程が交互に一巡してオクターブになることが解ります。

（Cを主音にした例）

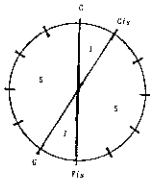
1：2型 ■図E



1：3型 ■図F



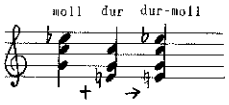
1：5型 ■図G



Alpha chords（アルファコード）

バルトークの作品を特徴づける和音で短調と長調2つの三和音の合成されたものです。

●譜例e



一番簡単な例をあげましたが，このDur-moll（長、短、2つの合成でできた和音）は他にいろいろな形が考えられますが大きくまとめてAlpha（アルファ）型と呼ばれます。これもAxis system（中心軸システム）と大きな関係があります。

〈参考文献〉

エルネ・レンドヴァイ著，谷本　一之訳

「バルトークの作曲技法」(全音楽譜出版社)

〈講師紹介〉

エルジェーベト・トゥーシャ教授

1928年ブダペストに生まれる。リスト音楽院にてピアノをErnö Danielに師事し，1948年優秀な成績で卒業する。同年，ジュネーヴ国際コンクールで第3位に入賞。1961年にはバルトークの「ピアノとオーケストラのためのスケルツォ」を世界初演するなど，バルトーク，リスト，ドビュッシーの作品解釈に深い造詣を示している。1968年にリスト賞を受賞。更に1979年にはハンガリー功労芸術家に叙せられた。

現在リストアカデミーの教授として後進の指導に当たる一方，チャイコフスキーコンクール，ドビュッシー，リスト＝バルトーク国際コンクールの審査員としても活躍している。1989年より武蔵野音楽大学客員教授として来日。

私の留学体験

【エピソードとアドヴァイス】

1990年8月31日㈮〈東音〉ホール　PM1:20～4:00

アンケート内容

今回のフェスティヴァルを開催するにあたり，講師の先生方へ講義内容に関するアンケートにお答えいただきました。

①略歴
②先生が留学された場所・学校名・時期を（複数の場合は全て）お書き下さい。
③師事された先生のお名前をお書き下さい。又，どのようにしてその先生をお選びになりましたか。
④日本にいらした時にレッスンした曲を外国でレッスンした場合，どのような点が違ったか，お聞かせ下さい。例：表現方法，レッスンの進め方の相違について等
⑤留学した事によってご自分にプラスとなった事，マイナスとなった事がございましたらお書き下さい。
⑥その他，海外留学を考えている方へのメッセージなど，どのような事でも結構ですのでお聞かせ下さい。

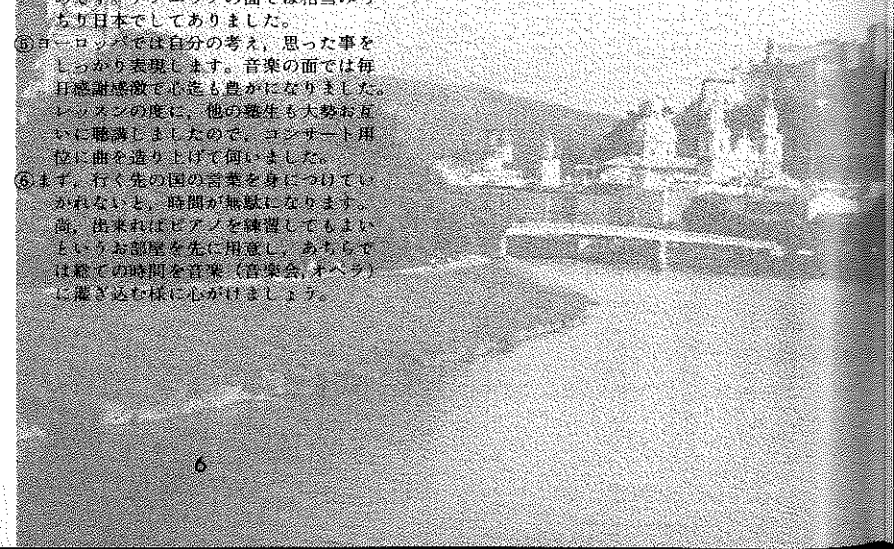
（掲載は五十音順，講演順未定。尚，当初予定されていました赤津ストヤーノフ里佳子先生は，都合で出演出来なくなりました。御了承下さい。）

青木　和子

①**略歴**：1929年7月より1933年7月までベルリン国立音楽大学，Artur Schnabel塾に留学。Artur Schnabelに師事。
"ペダルの現代技法"K. U. シュナーベル著の翻訳を手懸ける。（K. U. シュナーベルはA. シュナーベルの御令息で母上はKontra-alt）
昭和52年国立音楽大学より名誉教授称号を受ける。熊本音楽短期大学よりは昭和60年4月1日に顧問教授を，62年4月1日に名誉教授の称号を受け，現在に至る。
②**場　所**：ベルリン
学校名：ベルリン国立音楽大学・Artur Schabel塾
時　期：1929年7月～1933年7月
③**お名前**：Artur Schnabel
選んだ理由：神戸に居られたHeinrich Werkmeister先生（ドイツ人のCellist）のお勧めで。ベルリン国立音楽大学では1席でも空けば世界各国より何百人もの希望者がありましたのでSchnabel塾の方を受けてみる様にと申されました。
④**音楽的内容**：日本ではコンサートピアニストになる程のレッスンではなかったのです。テクニックの面では相当みっちり日本でしてありました。
⑤ヨーロッパでは自分の考え，思った事をしっかり表現します。音楽の面では毎日感謝感激で心迄も豊かになりました。レッスンの度に，他の塾生も大勢お互いに聴講しましたので，コンサート用位に曲を造り上げて御いました。
⑥まず，行く先の国の言葉を身につけていかれないと，時間が無駄になります。尚，出来ればピアノを練習してもまいもいうお部屋を先に用意し，あちらでは総ての時間を音楽（音楽会，オペラ）に浸り込む様に心がけましょう。

小川　哲朗

①**略歴**：1974年毎日学生音楽コンクール小学生の部第1位。桐朋学園大学音楽学部を休学し，1983年6月より1990年6月まで西ドイツケルン国立音楽大学に留学。1986年9月より1987年7月まで給費留学生として，ソ連モスクワ音楽院で学び1987年ケルン音楽大学に復学。ケルンのフィルハーモニーにおいて，マックス・ブルッフ生誕150年記念コンサートに出演。1988年ブゾーニ国際ピアノコンクール第2位。1989年ケルン国際ピアノコンクールディプロマ賞受賞。1990年ケルン国立音楽大学を最優秀の成績で卒業。
現在，この成績により，演奏国家試験を受けるべく，パーヴェル・ギリロフ氏のもとで研鑽中。
②**場所**：ケルン　**学校名**：ケルン音楽大学
時期：1983年6月～1990年6月以降
場所：モスクワ　**学校名**：モスクワ音楽院　**時期**：1986年9月～1987年7月
③**お名前**：パーヴェル・ギリロフ　ケルン音楽大学にて
選んだ理由：ロシアン・テクニックとロシアの演奏スタイルを学ぶため。
お名前：ミハイル・ヴァスクレセンスキー　モスクワ音楽院にて
選んだ理由：以前からコンタクトがあったため，ロシアの作曲家の作品を主に学ぶ。
④表現の具体例が豊富。音楽的演奏をさせるように生徒の気分を高揚へと導いていくのがうまい。人間的に暖みを感じる。
⑤音楽をする時におおらかさ，余裕をもてるようになったこと，怠け者になったこと。
⑥留学をするのなら早いほうがよい。大学を卒業してからでは2年しかいられない。（ドイツの場合）



草川　宣雄

①**略歴**：桐朋学園大学音楽学部卒業，学長賞受賞，卒業と同時に桐朋学園大学，東京音楽大学の講師となる。1972年10月より1983年までミラノ　ヴェルディ音楽院に留学。1973年５月ミラノのヴェルディ音楽院大ホールにて，テアトロ・ヌォーヴォ・オーケストラとベートーヴェンのピアノ協奏曲４番を共演。1974年同音楽院を満点の成績でディプロマを得て卒業。ソロリサイタルやミラノ・スカラ座のメンバーと室内楽活動を行なうかたわら，1975年より81年までコルトー国際ピアノコンクールの審査員を務める等，多岐に渡って活躍。G.ドゥルイン，J.ポッシ，三宅洋一郎，井口基成，井口愛子，C.ヴィドッソ（以上ピアノ）P.モンティアヌー，G.ビザッロ（室内楽）に師事。
現在，東京音楽大学助教授。

②**場　所**：イタリア　ミラノ
学校名：ヴェルディ音楽院
時　期：1972年10月～1983年

③**お名前**：カルロ・ヴィドッソ
選んだ理由：これからのピアニストとしてポリーニが注目されていた。(1972年)直接レッスンをＯＫされた。等
お名前：Ｐ・モンティアヌー　ヴェルディ音楽院にて
選んだ理由：ヴィドッソ教授の関係
お名前：Ｇ・ビザッロ　ヴェルディ音楽院にて（室内楽のレッスン）
お名前：Ｇ・スゼー　（プライベートレッスン）

④日本でも子供の頃，２人のフランス系カナダ人，又三宅洋一郎，井口基成，井口愛子の各異なる先生方に師事していましたので，簡単にはいえませんがレッスンに遊びが沢山ありました。

⑤日本にいなかったこと，日本を客観化できることと，逆に主観化できなくなったことがプラスであり，マイナスです。

⑥レベルにより考え方を持つべきです。すぐ大コンクールで優勝できる力の人は日本から直行。逆に他から文化を感じたい人はどこか一ケ所に　等々。

高山三智子

①**略歴**：東京芸術大学ピアノ科卒業。1971年９月より1972年７月までポーランド及び東独の文化省の招待によりクラコウ音楽院，ライプツィヒ音楽院，ベルリン音楽院で学ぶ。1972年9月より1975年６月までソ連文化省の招きでモスクワ音楽院にてヤコブ・フリエール教授に学ぶ。研究科修了。80年，ベルリン室内管弦楽団と共演。82年ソ連・国立音楽家協会（ゴス・コンツェルト）の招きでモスクワなど５つの都市で演奏旅行。83年ヴェルテンブルク室内管弦楽団と共演。84年ソ連国営放送ラジオ，85年ソ連国営放送テレビにそれぞれ出演。その他，国内外で多数演奏会に出演。1990年10月，ソ連の各地で，３回リサイタル３回コンツェルト計６回演奏旅行，又モスクワ室内オーケストラとモスクワ音楽院で演奏予定。
松野景一，田村宏，福井直俊，野呂愛子，ステファンスキー，フリエールの各氏に師事。現在，愛知県立芸術大学講師。

②**場所**：ライプツィヒ　**学校名**：ライプツィヒ音楽院　**時期**：1971年９月～1972年７月
場所：東ベルリン　**学校名**：ベルリン音楽院　**時期**：1971年９月～1972年７月
場所：モスクワ　**学校名**：モスクワ音楽院　**時期**：1972年９月～1975年６月

③**お名前**：ステファンスキー教授　クラコウ音楽院にて
選んだ理由：ワイマール音楽祭で認められて
お名前：ヤコブ・フリエール教授　モスクワ音楽院にて
選んだ理由：教授の演奏に感動し，教授に才能を認められ。

④フリエール教授にレッスンを受けた時から，以前日本で勉強したロマン派の曲は全部捨てました。勿論演奏会にも出しません。位立ての悪い服はどう直してもどこか変なチグハグな事が出るので…。日本だったら途中で切られそうと思う弾き方でも必ず全部弾かせて下さって，かならず良い箇所を褒めて下さいました。

⑤音楽の素晴らしさが分かる様になった事と，才能とは何かをはっきりと理解しました。モスクワ音楽院で学んだ事は世界最高の実力を知り，友人を得，自分の実力もはっきりと分って行動出来ました。

⑥本当に自分が習いたい先生か，合う先生かをしっかり見極めないと。留学は自分の勉強が順調なら，心も満足出来るし不安がないけれど，そのバランスが崩れると異郷を強く感じ，心がアンバランスになり，大変です。

播本三恵子

①**略歴**：第13回毎日学生音楽コンクール東日本２位。第37回毎日音楽コンクール入選。西ドイツ音楽コンクール２位。東京芸術大学大学院ピアノ科修了。1973年１月にハンブルク国立音楽大学入学。1976年同大卒業。マイスタークラスへ進む。1978年マイスタークラス最高点で修了。西ドイツ，日本各地で演奏会。ラジオ，テレビ放送出演。田村宏，エリザ・ハンゼン，ヴィルヘルム・ケンプに師事。西ドイツ・リューベック国立音楽大学，愛知県立芸術大学講師を経て，現在，東京音楽大学助教授，東京芸術大学非常勤講師。

②**場　所**：西ドイツ　ハンブルク
学校名：ハンブルク国立音楽大学
時　期：1973年１月～1978年７月

③**お名前**：エリザ・ハンゼン教授　ハンブルク国立音楽大学にて
選んだ理由：エッシェンバッハの先生であり，まだ日本人の生徒をもっていらっしゃらなかったため
お名前：Ｗ・ケンプ
学校名：ポジターノでの
選んだ理由：ベートーヴェンの全曲解釈講座を受講したかったため

④“自分がどのように考え，感じ，表現したいのか…ということを明確にし音にこめて行くという作業が，演奏という行為の基本姿勢である”と，この当たり前のことが自分の中でしっかりと了解されていなかったことに気付き，まずガク然としました。そして私なりの表現が浮かび出てくるまでは何も言って頂けませんでした。留学とは“自分”を捜しに行った旅でもありました。

⑤マイナスになったことは１つもありません。プラスになったことは書き尽くせませんので当日お話出来ると思います。留学という体験なしには今の自分はなかったでしょう。

⑥行けばなんとかなる　という安易な気持で留学すべきでありません。まず，出来るだけ語学力をつけること，勿論日本で準備するには限りがありますが，いくらかでも話せるようになって出発しないと多くの人に迷惑をかけることになりますし，本人も惨めな思いをします。又，レッスンもはかどりません。ひと度外国に出れば，自分が日本人として常にみられているという自覚を忘れないこと。旅の恥はかき捨てでは生活する資格はないでしょう。どこに留学するかということも色々な角度から慎重に考えねばなりません。